

大学開学頃の思い出

長谷川 博
生物資源管理学科

1995年4月3日(月)、開学の日の朝に研究室の向かいの実験室に初めて入った時、しばし呆然とした。気がつくや、隣の研究室の重永先生(故人、生物資源管理学科初代学科長)がそばにおられ、「これはサティアン」とつぶやかれた。こうして、滋賀県立大学が正式にスタートした。

大学開学の年は大きな出来事が続いて起こった。1月17日には阪神・淡路大震災があり、3月にはオーム真理教事件が起こった。そのオーム真理教のアジトでサティアンと呼ばれる猛毒のサリンガスを製造していた施設の配管と、実験室の天井にぶら下がった空調配管のイメージがだぶったからである。サティアン類似の構造が見えたのは、実験室には天井がなく、3階の私の実験室の場合は屋根の裏側まで特に広い空間が広がっていたからだった。この配管を見せるデザインは設計者の自慢であったが、実用性を重視する理科系の教員には余分な長物としか映らなかった。また天井のない実験室は反射がなく薄暗かった。したがって、2期工事に入る前に設計の変更を求める教員と設計者との懇談会が開催された時、大ゲンカの会になったのも仕方なかった。実験のしやすさなどまったく考慮に入れず、デザインを優先する設計者側と実用性を求める教員との間に流れた険悪な場を、滋賀県の建築担当の方が「教員の方の言い分は良くわかるので、ここは私に一任ください」とまとめたいただけなければ、あの日の会はどこまでも続いたと思う。おかげでB6棟(B4棟も)の実験室には天井が作られることになった。B3棟とB5棟の実験室には補助照明が加えられた。

建物に対するビックリ仰天は、実験室の天井だけではなく、いろいろな所で見つかった。ことにB0棟2階廊下に設置されているトイレに夜に入ろうとした時、照明のスイッチがわからなかった時はうろたえた(現在は終夜照明がなされていますが、スイッチはどこにあるのかご存知ですか? 答えはこの稿の最後にあります)。環境科学部の建物は、原案では工学部の建物のように、荒神山に向かって縦2列に伸びるように設計されていた。これでは、各部屋は朝日か夕日をまともに受けることになり、夏には耐えられない室温になるだろう。その対応策として設計者は室温上昇については空調設備の容量をあげることで対処したいと答えたが、開設準備委員の末石先生の「環境科学部は建物から環境問題に取り組む

姿勢を示さなければならない」という主張が取り入れられ、現在のような建物の配置になったと記憶している。それでも環境科学部の各部屋の南向きの窓は開閉できる部分が小さく、温室のようになることには変わらない。各研究室の窓には網戸が設けられているが、網戸が硝子戸の内側に設置されているのも環境科学部棟の不思議のひとつである、秋の夜、琵琶湖岸の涼風が狭い窓からでも研究室に入ってくるのは、夜まで仕事するときに元気をもたらせてくれた。が、帰り際に窓を閉める時には秋の虫の大群が網戸に押し寄せてきているので、それらをかきながら窓を閉めるのには閉口した。研究室の向かいの実験室には窓の構造上網戸が設置できない。だから、換気が必要なときは虫が飛び込んでくることは覚悟の上で窓を開けて実験することになる。虫はまだいい方で、学生がまだ来ていない開学当初の静かな実験室には、ねぐらを求めるハトが飛び込んできて困ったこともあった。

環境科学部の各棟の端には出入口が設けられているが、この出入口は建前上「非常口」であるらしい。開学間もない頃に「ここは非常口ですから普段の使用は控えること」という張り紙がなされていたのも、今となっては懐かしい思い出である。

このように本学部(本学全体にまで拡張できるかどうかは知らない)の建築物についての話をすれば、創立以来18年経った今でも徹夜で話ができるように思う。建築デザインの良さとは、見た目ではなく人が住んでみて初めて評価できるものと考えるのは小生だけでないはずである。退職にあたって研究室を整理していたら、建築中の環境科学部棟の写真(1994年2月か3月、写真1)が出てきたので参考にしていただきたい。どの辺りかお判りですか?

環境科学部の教育については、やはり「環境フィールドワーク(FW)」をどのように立ち上げるのが最重要課題であった。環境問題の把握と問題解決の道を探るのは学科横断的な内容にしななければいけないとの認識は当初からあったが、開設準備室の机上の論議ではどのような内容を、どのような方法で行えばよいかを決定できるものではなかった。そこで1年目のFW Iはクラス編成は学科混成とし、4学科・専攻(当時、環境建築デザインは環境計画学科の一専攻であった)がそれぞれテーマを設定して

担当することになった。FW Iはその後の担当教員の熱心さで大きな変貌を遂げることができたが、複数学科の教員でクラスを担当するような現在の方式になったのは、2年目か3年目からだったと思う。4クラスに分けるのは開学当初のやむを得ない事情によるものであり、もっと大胆なクラス編成や実施方式が考えられると思う。

1年目のFW Iの実地調査は土曜日全日を使って実施した。私は重永先生と矢部先生とチームを組んで、愛知川流域の環境というテーマを設定した。愛知川の下流から上流の永源寺町（現、東近江市）政所まで、途中永源寺ダム昼食休憩をはさみ、バスで廻る行程であった。いくつかの失敗はあったが、FW Iの実地調査は全日を使った第1回目が最も充実したものであった。ただ、学生には評判が悪く、2年目からは現在のような午後半日の実施に変更された。学生に不評だったのは、開学直後は大学周辺には店が少なく（当時はコンビニもほとんどなかった）、弁当等の調達が不便であったことが最大の原因だと思っている。この問題は現在でも十分に解決できているとは思えないが、希望者には弁当の予約等の手配をすれば、全日を使った充実したFWが実施できることと思う。是非、検討していただきたい。

大学のカリキュラムは日高初代学長の方針で、基礎科目から専門科目へという一方向の学習ではなく、まず何らかの興味を持つ専門科目を履修し、その後に基礎科目を学べるような学習コースも作るべきであるという方針が強く反映された。特に環境科学部のカリキュラムにその方針が強く表れており、必修科目が少ないのはその遺産である。このようなカリキュラムは「人が育つ大学」という考えに沿ったものであるが、やはり理想的すぎたようである。実際に講義を行ってみると、学生の理解力上昇に効果があるとは思えず、また専門科目から基礎科目へと履修する学生もほとんどなく、理想と現実のギャップは大きすぎたと言わざるを得なかった。ところで、最近の文部科学省の大学教育に関する方針は、大学の学部教育にも中等教育までの学習指導要領を導入する前兆のように思える。半世紀前と大学の社会的役割も学生の気質も変化したので、大学教育の中等教育化は時代の流れかもしれないが、政治に対しても素直に反応し（したがって時には力に頼ることもあったが）、自由に勉強できた我々の時代の大学が懐かしい。

大学開学後の4年間は固定期間という、いわば仮免許期間なので、人事だけでなくカリキュラムも変更できなかった。先に述べたように、開学当初のカ

リキュラムには実情に合わない部分が多々あったので、5年目から新カリキュラムに移行することになった。環境科学部独自の複数学科専門科目という科目群もこの時の産物である。限られた教員で多様な知を有する人材を育てるために、他学科で開講する科目を専門科目に取り入れるために設けられたものである。近年の環境科学部は学科独自の動きが顕著であり、制度だけでなく学生・教員の学科間の人的交流も希薄になってきているように思う。複数学科専門科目を見直すという意見もあるようだが、ここは当初の目的を考慮して対応していただきたい。

開学の年の入学式については、大学開設準備室の主監であり本学の事務局長であった堀江正俊氏が著された「局長の卒論—滋賀県立大学開学の歩み」（サンライズ出版、1999）に詳しいが、まだ交流センターも完成しておらず、寒々とした体育館で執り行われた。教員にも参加が求められた。儀式と会議が苦手な小生も、このときは積極的に参加した。講義棟と管理棟・図書館はすでに完成していたが、環濠も工事前であり、研究棟は半分しか完成していなかった。このような荒野の真ん中に突然現れた建物で勉強することに、意気揚々とした入学生がいた一方で、何もないところで不安を感じた入学生も多かっただろう。1期生に仮面浪人が多かったのは、試験日程が他大学と異なっていたことのほかに、学生の心理も大きかったのではないだろうか。振り返ってみるとそう思うことがある。

入学式が終わってしばらくするとキャンパス工事が再開された。2期工事のため建物は塀に囲まれることになったが、徐々にキャンパスが整備されていくのを見られたので、閉塞感はなかった。B5棟3階の端にある私の研究室は、環境科学部棟のもっとも奥の部屋になってしまった。それにも関わらずたまたま学生が訪ねてきてくれると、寂しさを紛らすために学生を引き留めて長時間談笑したものである。それは学生も同じ気分だったと思う。おかげで第1期生だけは卒業式のときに全員の顔と名前が一致した。

学部棟の基礎工事が行われているとき、毎日黒っぽい水分をたっぷりと含んだ泥が大量に排出され、圍場実験施設と陸上競技グラウンドの間に積まれていくのを研究室から見ることもできた。滋賀県立大学のキャンパスは曾根沼、野田沼からつづく湖岸の微高地の内側の湿地帯に建てられていることがよく理解できた。阪神・淡路大震災から間もなかったのに、琵琶湖周辺の活断層で直下型地震が生じたときにはどのようなのか心配になった。幸いにも私の在

任中に大学周辺を震源とする直下型の地震は生じなかったが、東北大震災の長い周期の揺れを泥が積み重ねられた土地に設置された人工気象装置の中で体験することになった。

生物資源管理学科は草津に設置されていた県立短期大学農業部からの移行教員が多く、1年目から着任したのは私を含めて4人のみであった。私はそのなかで一番年下であり、ただ1名の助教授であったから、いろいろな役割が回ってきた。会議は当時から苦手であったが、他学部・他学科の教員と親しくする機会が得られる貴重な場であった。それが私の研究・教育から大学運営への参加まで、いろいろな場で役立った。

建物の話に戻ると、人数の少ない夜の廊下はどことなくす気味悪かった。暗くなってから2階の廊下をB5棟からB1棟の方へ歩いていくと、前方のガラスに人影が見えるように思える。でも近づいてくる気配はない。曲がった廊下なので、自分の姿が前方の窓のガラスに反射して、それを誰かの人影と思いきんだのだ。学部棟に人が多くなるとこのような体験をすることはなくなった。これは慣れのためと思うが、それともガラスが汚れて反射能が落ちたためかもしれない。

私は18年間、自宅のある京都市山科からJRとバスで通ったが（実は運転免許を持っていない）、通勤が苦と思ったことは一度もなかった。通勤時間は職場、家庭両方の煩わしさから解放される自由時間であった。山科から大阪へ通った20数年間は社内の埃が原因と思われる鼻炎にたびたび悩まされたが、彦根への通勤は車内の混雑はほとんどなく、鼻炎から解放され健康な18年間を過ごすことができた。私は暑さが苦手なので、彦根は昼の気温があまり高くないので過ごしやすかった。初等、中等教育を滋賀県で受けた者にとって、彦根の冬の天候は想定内であった。でも、開学の年のクリスマスイ

ブの日の大雪には閉口した。30cm程度の積雪にはビックリしなかったが、湖周道路が全通していなかった当時は、名神や8号線から迂回する車が大藪の旧道にあふれてひどい交通渋滞が起こり、バスが数日間ほとんど動けなくなった。おかげで南彦根駅から大学まで歩いたものだ。大学に着くと環境生態学科の伏見先生が、キャンパス内でクロスカントリースキーを楽しんでおられたのを記憶している。

開学当初はよく雪が降ったが、その後雪のない冬が続いた。が、この数年来雪の日が多くなってきているように思う。ことに2012年の冬は開学の年の大雪を思い出させるほどの積雪だった（写真2）。でも、昨年の雪のキャンパスのイメージは開学当初とは異なっていた。キャンパスに人間が多くなり、除雪が速やかにされるようになって不便さがかなり解消されたことも一因であろうが、やはり木々が成長してキャンパスの景観が大きく変わったことが大きいと思う。ただ、雪が降れば学生が雪だるまを作るのは18年間変わってはいない。

このように書き綴ると、連鎖反応として開学当初のさまざまな姿が思い出されてきた。あの時こうすればよかったという苦い思い出もある。もっと書きたいこともあるが、これからは若い世代の人で滋賀県立大学を発展させてほしいので、昔の感傷を述べるのは良くないだろう。過去の思い出は去る者の胸の中に納めておかねばならない。あと20年たった時のキャンパスの雪景色はどうなるのだろうか。もし生きているのなら、雪景色の見物を兼ねて大学のその後の発展を見に来たい。

設問の答え

B0棟1階の廊下のトイレの照明のスイッチはB0棟1階の吹き抜けのホールにあります。同ホールに入って右側には狭い通路があって、その壁にあるのです。どのような発想をすればこのようなスイッチの配置を考えられるのか、18年間ついに理解できませんでした。

